様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：５５５０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００４８

研究課題名（和文）日本近代文学における活字文化と美術との共鳴に関する研究

研究課題名（英文）Study on resonance between literature and art in Modern Japanese Literary

研究代表者
一色　誠子（ISSHIKI, Seiko）

徳山工業高等専門学校・一般科目・教授

研究者番号：８０２５９９３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、読者と著者を結び、作家と装幀家あるいは芸術家を結ぶ役割をしている装幀に注目したものである。装幀をめぐっては、自著に画家の作品を纏う作家の思惑と、作家の作品をキャンバスとして新たな作品世界を生み出す画家たちの思惑、作家が画家の作品を纏うことに宣伝効果を期待する出版社の思惑が交錯している。これらのことを、室生犀星の装幀を軸に、犀星の装幀の過程と確立において関わった恩地孝四郎と岸田劉生を例に、文学と美術が共鳴していく過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research focuses attention on the work that connects readers and authors and plays a role of linking writers and composers or artists. In regard to binding, there are speculations of writers drawn on paintings of book, publishers expecting the advertising effect of the writers 'paintings that create artworks as a canvas and artists' The mix of speculations. I will clarify the process by which literature and art resonate with these examples as an example of Koushirou Onuti , Ryusei Kishida and Saisei Muro .

研究分野：日本近代文学

キーワード：装幀　造本　室生犀星　岸田劉生　恩地孝四郎

１．研究開始当初の背景

（１）装幀をめぐる動き

装幀・造本をめぐる作家と装幀家あるいは芸術家の結びつきは、明治期の印刷出版、活版洋装本から 60 年代にブックデザイナーが出現するまで色濃いものであった。しかし、現在は、これらの書物のほとんどは古書でも入手が困難であり、復刻本でも出版されない限り全集で読むしかない。つまり、作家が装幀や挿絵などの図像にまで気を配り、「書物」として世に送り出したものからの作品の読みを展開することが少なくなってきているということである。

近年、装幀を含む展覧会が開かれることが多い。例えば、「『白樺』誕生 100 年　白樺派の愛した美術」（平成 21 年　財団法人ひろしま美術館　ほか）、「装幀の美　恩地孝四郎と犀星の響宴」（平成 21 年　室生犀星記念館）、「生誕 130 年　橋口五葉展――「大正の歌麿」と謳われた、近代木版画家の軌跡――」（平成 23 年　北九州市立美術館分館ほか）、「画家岸田劉生の奇跡」（平成２４年　北九州市立美術館分館）である。「画家岸田劉生の奇跡」展では、余技ではない岸田劉生の装幀についての展示と指摘が興味深いものであった。「装幀の美　恩地孝四郎と犀星の饗宴」は別にして、装幀が語られる場合、その多くは美術（芸術）作品としてのアプローチによるものである。出版時にはあった、作家と装幀家・画家、出版社の交錯した思惑や、三者の協働もしくは活字文化と美術との共鳴への言及は本格的ではない。

（２）装幀や挿絵に関する研究

ただし、これまでも日本近代文学研究において、装幀や挿絵を通して作品世界を読み解くことは繰り返されてきた。《文学と図像とのかかわりを問うことは「文学」および「文学研究」の枠組みを問うことでもある》として、「日本近代文学」第 78 集（日本近代文学会　2008 年 5 月）で近代文学の図像学が特集で組まれた。

筆者はこれまでに、作品を描くことと造本を同次元として捉える創作意識を持ち、独特の作品世界を展開する室生犀星の装幀と造本意識について、犀星とその周辺の作家と装幀家を取り上げ論じてきた。周知のように、室生犀星は自身による装幀だけでも 56 作品に及び、自らが装幀しない場合は、自著の装幀や題簽を恩地孝四郎、岸田劉生、畦地梅太郎、山口蓬春らに託している。これらについては、「作家室生犀星と装本家恩地孝四郎――『本を造るということ』――」（一色誠子「日本文学研究」第 44 号　平成 21 年 1 月）、「装幀と造本をめぐる作家・装幀家・芸術家の思惑――室生犀星とその周辺から――」（一色誠子　「日本文学研究」第 46 号　平成 23 年 1 月）にまとめている。

（３）本研究への視座

これまでの研究過程で、装幀や造本に関する議論が盛んになされ、それ以降の装幀と造本に影響を与えていった昭和十年前後は、”作家たちの言い分”と”装幀家あるいは芸術家の言い分”が交錯しながら共鳴の音色が大きく変化する地点であることがわかった。そして、ここに編集者（出版社）が加わり、その音色がさらに変化していく過程は探求の余地が大いにあると考えた。

２．研究の目的

読者と著者を結び、作家と装幀家あるいは芸術家を結ぶ役割を果たしている装幀に注目する。装幀をめぐっては、自身の作品に画家の作品を纏う作家の思惑と、作家の作品をキャンパスとして新たな作品世界を生み出す画家たちの思惑、作家が画家たちの作品を纏うことに宣伝効果を期待する出版社の思惑が交錯している。本研究では、室生犀星の装幀・造本を軸に、作家、装幀家あるいは芸術家、出版社の三者の思惑を整理し、当時の文壇の動きや出版界の動きを対比しつつ、活字文化と美術とが共鳴していく過程を明らかにしていくことが目的である。

３．研究の方法

（１）装幀と造本に関する議論がされ始めた明治から、ブックデザイナーが出現する 60 年代（昭和 35 年～昭和 40 年ごろ）までに出された作家側の見解と装幀家・芸術家側の見

解を、「印刷雑誌」、「図書月報」、「書物展望」を調査し整理していく。
（２）室生犀星の装幀の変遷のなかで、画家が関わった装幀のうち、岸田劉生について、劉生が衛星的存在として位置づけられている「白樺」からの犀星の装幀への影響を、「春陽会」、「大調和」、「不調和」への犀星の関わりも含めて、文献調査をする。
（３）次の時代に区切り、装幀についての作家と装幀家・芸術家（画家）の共鳴を、（１）に挙げた雑誌のほか、「書窓」、「古書通信」、「図書」、「出版ニュース」、「美術手帖」などを調査し、整理分析をする。
①明治 26 年～大正 15 年
②昭和 2 年～昭和 20 年
③昭和 21 年～昭和 44 年

４．研究成果

装幀と造本に関する議論がされ始めた明治から、ブックデザイナーが出現する 60 年代（昭和 35 年～昭和 40 年ごろ）までに出された作家側の見解と装幀家・芸術家側の見解については、平成 21 年～平成 22 年にかけ、「古書通信」「書物展望」、「書窓」を中心に文献調査をし、その結果は、「1.（２）」に記した「装幀と造本をめぐる作家・装幀家・芸術家の思惑――室生犀星とその周辺から――」にまとめている。それを踏まえ、再度、作家と装幀家・芸術家の装幀に関する言及を「印刷雑誌」、「図書月報」を加え文献調査をした。この調査は、出版社の思惑を読み取りたいという意図があった。

これらの結果を視野に入れつつ、犀星の造本意識を探る中で、次の視点からのアプローチが必要になった。それは、「白樺」の影響である。白樺派の衛星的な存在であった劉生が犀星の『高麗の花』（大正 13 年 9 月　新潮社）、『魚眠洞随筆』（大正 14 年 6 月）、『庭を造る人』（昭和 2 年 6 月）を装幀したつながりから。また、犀星も初期の文学活動の頃（「感情」のころ）は、白樺の文学上の思想に寄っていたこと。そして、武者小路実篤主催の「大調和」への犀星の寄稿や劉生が初期にかかわっていた「春陽会」への犀星の賛同文などからも、白樺とその周辺からの影響がなかったとは言い難い。このようなことから、西欧からの新しい刺激をいち早く発信し、活字文化と美術の共鳴を一つの雑誌の中で展開していた「白樺」の同時代に与えた影響を、装幀と造本の観点から考察した。

劉生の装幀画の背景となったのは、「白樺」であり、実篤や長与善郎との交友であることは周知のことである。この「白樺」で花開いた劉生の装幀画は、白樺の同人を中心にその著書に纏われ高評価を得ていく。白樺の同人ではない犀星も、《岸田劉生氏に初めて詩集「高麗の花」の装幀をして貰うて、その装画が自分の気もちに快い調和を与へてくれたのに尠からず喜びを感じた。》（「劉生と惣之助」昭和 2 年 5 月 1 日「大調和」）と述べ、劉生の装画が自著にも自身の心持にも合い、とても満足していることを読み取ることができる。一方で、岸田劉生の犀星に関する記述はほとんど残されていない。「劉生日記」の大正 12 年 8 月 4 日と大正 13 年 7 月 29 日火曜日の二箇所に僅かに残されているだけである。劉生の装幀画については、例えば、東珠樹が「岸田劉生の装幀画」の中で、《劉生の装幀が、最初から書物そのものを一つの芸術作品と考え書物と装幀画が一体となってはじめて ” 本 ” という一つの作品となることを意図しているものであることは、その作品（装幀本）を一つでも見れば、一目瞭然であろう。書物というものは、劉生にとっては単なるキャンバスではなかった。装画は、その書物の内容にまで深く立ち入って（内容と深い関わりをもって）、書物そのものを一個の独立した芸術品として、美しく完成させたのである。そこに、劉生の装幀の独自性があり、装幀芸術としての真価がある、と私は考えている。》（「季刊銀花」第 39 号　1979 年）と述べている。確かに劉生の装幀画にある芸術性が認められ、多数の詩人、作家たちに受入れられてきた。ここに、芸術家と作家の共鳴を見ることができる。しかし一方で、劉生が犀星の『高麗の花』、『魚眠洞随筆』、『庭を

造る人』を手がけたころの例えば、『武者小路実篤全集』（大正 13 年　芸術社）、『木下利玄全歌集』（大正 15 年　岩波書店）、実篤『母と子』（昭和 2 年　改造社）を比べてみると、構図を含めてその装画は酷似していることがわかる。《書物というものは、劉生にとっては単なるキャンバスではなかった》のではあるが、作家別やジャンル別に装画を変えることはせず、結局は、書物というキャンバスに自らを表現し続けていたのである。

詩や小説といった活字文化と美術の共鳴は、一冊の書物が出来上がることで完成するのではあるが、そこに至る過程では、必ずしも協働による共鳴が生まれているとは限らないことも明らかになった。

期間内の文献調査で、装幀と造本をめぐる出版社の思惑について解明ができなかった。例えば、犀星の日記で、《谷田昌平来る、随筆「女ひと」の装幀などについて話し合ふ》（昭和 30 年 7 月 31 日日曜日）などの、編集者とのやり取りが短く記されたものはあるが、作家や装幀家・画家のように装幀と造本について積極的に論じたものについての調べが足りていない。今後の課題として、これらの調べをすすめ、作家、装幀家あるいは芸術家、出版社の三者思惑を踏まえた、文学と芸術の共鳴をまとめたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）
※投稿中（掲載決定／平成 29 年 8 月発行）
一色誠子「室生犀星の装幀と造本に関する考察――その変遷と確立」（「燔祭」第 7 号　「燔祭」の会）

〔学会発表〕（計　2 件）
※研究会報告
① 一色誠子「活字文化と美術との共鳴について」――室生犀星の場合（平成 26 年 10 月 18 日　室生犀星学会金沢例会研究報告　於：室生犀星記念館）
② 一色誠子「室生犀星の造本と装幀に関する諸問題」（平成 27 年 6 月 20 日　室生犀星学会金沢例会研究報告　於：室生犀星記念館）

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
一色　誠子（ISSHIKI Seiko）
徳山工業高等専門学校・一般科目・教授
研究者番号：80259936

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
なし　　（　　）